

Ⅱ．小学部

1．小学部研究の経緯

1) 前年度までの研究経緯と今年度の取り組み

小学部では、平成 29(2017)年 4 月に告示された特別支援学校小学部学習指導要領(以下、学習指導要領)を踏まえ、平成 30(2018)年度より、小学部カリキュラムにおける教科の目標や内容の位置付けの検証と教科等を合わせた指導における算数・国語の授業実践研究に取り組んできた。昨年度より、学校運営方針並びに全校研究方針に基づいて小学部カリキュラムの見直しを行い、これまで各教科等を合わせた指導で取り組んできた国語、算数、生活の内容を教科別の指導として取り組むこととした。

昨年度は国語の授業研究に取り組んだ。成果として、教科等を合わせた指導から教科別の指導へ転換し、教科の目標を達成するために文部科学省著作教科書(☆本)や他の絵本などを題材として活用しながら単元開発に取り組み、3 観点による学習評価の基本的モデルについて整理することができた。

2) 今年度の小学部研究方針

今年度小学部では、研究開発学校指定事業の 1 年目として、学校研究方針に沿って以下の 4 点を方針として研究に取り組んだ。

-
- ・知的障害特別支援学校学習指導要領に準拠した、小学部生活科カリキュラムの構築と内容の充実
 - ・学び方の多様な児童が協同的な活動を通して学び合う、集団の授業づくり
 - ・目標を達成するための題材選び、個々の児童に合わせた教材の工夫
 - ・教科横断的な学びの試行と整理
-

3) 知的障害特別支援学校小学部生活科カリキュラムの構築と内容の充実

週時程上の小学部生活科の取り扱いは以下のとおりである。生活・国語・算数・音楽・図工・体育・道徳・自活を合わせた指導で行う「はなぐみたいむ」を 2 単位時間(はな)、生活・道徳を合わせた指導(はな・つき・そら:生活 A)を 1 単位時間、教科としての「生活科」(つき・そら:生活 B)を 1 単位時間として設定している。その他、支度や着替え、給食、朝の会、帰りの会の日常生活指導(全学級)を毎日設定している。

本研究にあたり、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編、小学校学習指導要領生活編を参照しながら改めて「生活科で育みたい力」の検討を行った。方法として、「児童たちの現在の興味関心」「児童たちに学んでほしいこと」等を各教師が付箋に書いて意見交換を行った後、そこで出てきたキーワードをもとに、再度学習指導要領に立ち返りながら検討した結果、以下の 3 点となった。

- 様々な体験から興味・関心を広げ、知識を身につけ、「思い」「願い」をもつ
- 自分自身と他者とのかかわりの中で 自分でできることをふやす
- 社会とのかかわりの中で、身の回りにあるもののしくみを知り、
きまりを守って安全に生活する

2. 授業づくりの実際

1) 小学部 1・2年（はな組）の授業実践

学部・年/組	教科等	時数（想定）	実施時期	作成者
小学部・はな組	生活	5時間（3回）	9～10月	宇佐美太郎

1. 単元名

お出かけしよう②「授業に必要なものを買に行こう」

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	年齢的に一人で出歩くことはないはな組の児童であるが、保護者に児童が信号機をきちんと見て横断歩道を渡っているかどうか聞き取りを行ったところ、多くがそうではないことがわかった。将来の一人通学に向けて交通ルールを理解したり、実際に外を歩く経験を積んだりすることは必要だと考える。また、自分でお金を払って好きなものを買う経験もほとんどなかったことから、一学期にコンビニでの買い物学習を行った。低学年の段階から自分の好きなものを選び、金銭のやり取りをする体験を継続して積み重ねていくことが必要であると考えた。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	外遊びや交通ルールを題材とした絵本をパソコンに取り込み、児童の注目が高まる大型モニタに映し出しながら読み聞かせを行う。また、歩行者用信号機を題材としたプレゼンテーションや動画を用いて事前学習を行う。買い物学習では、近隣の100円ショップに行き、授業に必要な道具や材料を購入する。一学期の買い物学習でコンビニエンスストアのセルフレジを使用して支払いを行った。本単元では有人レジでの支払いを経験する。児童の意欲を高めるために一人ずつ財布を準備し、お金を入れて自宅から持ってきてもらうこととした。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	将来の一人通学に向けて交通ルールを理解したり、実際に外を歩く経験を積むことをねらう。また、買い物学習を通してお金の存在と価値に気づき、今後の社会生活を豊かにしていくことにつなげたい。

3. 単元目標（単元全体に関わる内容）

単元を通して目指す子どもの姿		
保護者以外の人と安全に気をつけながら校外を歩行するとともに、自分の好きなものを選び、支払いを自分で行う		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
① [1段階イ(イ)] ② [2段階イ(イ)] ③ [1段階ク(イ)] ④ [2段階ク(イ)] ⑤ [1段階ケ(イ)] ⑥ [2段階ケ(イ)] ⑦ [1段階コ(イ)] ⑧ [2段階コ(イ)]	⑨ [1段階イ(ア)] ⑩ [2段階イ(ア)] ⑪ [1段階ク(ア)] ⑫ [2段階ク(ア)] ⑬ [1段階ケ(ア)] ⑭ [2段階ケ(ア)] ⑮ [1段階コ(ア)] ⑯ [2段階コ(ア)]	⑰ [1段階]

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	授業に必要なものを買に行こう！	4	<ul style="list-style-type: none"> ・大型モニタを使った「あぶないくうびい」の読み聞かせを聞く。 ・大型モニタとプレゼンテーションを使った信号の学習を行う。 ・購入するものとその目的について知る。(1・2時は楽器とエコバッグを、3・4時は粘土を購入する。) ・個々の実態に応じて教員と手を繋いだり2列になったりする、または一人で並ぶ。 ・校門前の信号を、歩行者用信号を見てから手を上げて順番に渡る。 ・店舗では、待機するグループと買い物をするグループに分かれ一人ずつ買い物をする。 ・春日通りの信号を、歩行者用信号を見てから手を上げて順番に渡る。 ・自分の買ってきたものを発表する。
2	信号機を見よう	1	<ul style="list-style-type: none"> ・大型モニタとプレゼンテーションを使った信号の学習を行う。 ・校門前の信号を一人ずつ渡る。 ・動画を見て振り返りをする。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
①安全に関わる初歩的な知識や技能を身に付けている。 ②安全や防災に関わる基礎的な知識や技能を身に付けている。 ③金銭の扱い方などに関心をもっている。 ④金銭の扱い方などを知っている。 ⑤簡単なまきまりについて関心をもっている。 ⑥簡単なまきまりやマナーについて知っている。 ⑦身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などについて関心をもっている。 ⑧身近な社会の仕組みや公共施設の使い方などを知っている。	⑨身の回りの安全に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組もうとしている。 ⑩身近な生活の安全に関心をもち、教師の援助を求めながら、安全な生活に取り組もうとしている。 ⑪身の回りの生活の中で、教師と一緒に金銭を扱おうとしている。 ⑫身近な生活の中で、教師に援助を求めながら買い物をし、金銭の大切さや必要性について気付いている。 ⑬身の回りの簡単なまきまりに従って教師と一緒に行動しようとしている。 ⑭身近な簡単なまきまりやマナーに気付き、それらを守って行動しようとしている。 ⑮身の回りにある社会の仕組みや公共施設に気付き、それを教師と一緒にみんなに伝えようとしている。 ⑯教師の援助を求めながら身近な社会の仕組みや公共施設に気付き、それらを表現しようとしている。	⑰自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に関心をもち、意欲をもって学んだり、生活に生かそうとしたりしている。

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数：A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定：A 概ね妥当 B 要検討()
題材：A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定：A 概ね妥当 B 要検討()

(1) 単元の概要

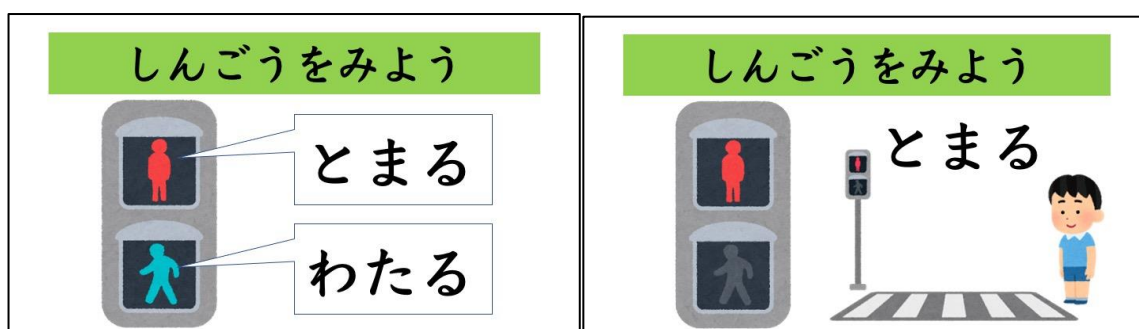
小学部1・2年（はな組）は1年生4人、2年生4人、計8人の複式学級であり、本単元は6月から12月にかけて計画された、「お出かけしよう①②③」の単元「お出かけしよう②」である。「お出かけしよう①②③」は将来の一人通学や就労に向けて、低学年の段階から交通ルールを理解したり実際に外を歩く経験を積んだりすることが重要であると考え計画をした。また保護者に聞き取りを行ったところ、ほぼ全ての児童が自分でお金を払って好きなものを買う経験がほとんどなかった。そこで、ただ校外を歩行するだけでなく、歩行の目的として「買い物」を設定することで、児童にとっての学習内容を充実させると共に、活動に対する見通しを持たせられると考え、本単元を含めた授業を設定した。

保護者への聞き取りの中で、買い物に行って自分の好きな飲み物や食べ物を選んだ経験もほぼなかったことがわかり、「お出かけしよう①」では徒歩数分のコンビニエンスストアに自分の好きな飲み物やお菓子を購入しにいった。「お出かけしよう①」では、ほとんど一人で外歩きをしたことのない1年生と、昨年度数回の経験がある2年生の外歩きと買い物の実態を把握し、次小単元の計画に反映させた。

本単元では歩行距離を伸ばし、目的地であるお店に行くまでに歩行者用の信号を4回渡るルートを設定した。前単元で歩行者用信号をほとんど見ていない児童がいたことから、保護者に聞き取りを行ったところ、多くが信号を見て渡っていない、もしくは保護者が先導や誘導をしていることがわかったためである。また、前単元はセミセルフレジ（商品のスキャンは店員が行うが、支払い操作を自分で行う）での買い物学習をおこなった為、本単元では有人レジで支払いができる店を選んだ。

本単元は本来4時間、2回の校外歩行で計画していた。詳細は『(3) 指導と評価』で触れるが、実際2回の校外歩行を行ったところ、距離の短い横断歩道（児童から歩行者用信号機までの距離が比較的近い）でも歩行者用信号機に視線を向けることが難しい児童が複数いることがわかった。その為、2次「信号機を見よう」を設定し、信号を見るための学習活動を組み入れた（図Ⅱ-1）。

生活「お出かけしよう①②③」の授業を通して、将来の一人通学に向けて交通ルールを理解し、実際に外を歩く経験を積むことをねらう。また、買い物学習を通してお金の存在と価値に気づき、今後の社会生活を豊かにしていくことにつなげたい。



図Ⅱ-1 学習用スライド（一部）

(2) 他教科との関連

本単元では購入するもののテーマとして、実際に授業で使うものを設定することで、本単元への学習意欲を高めると共に、自分が選んで購入したものを実際の授業で使用し生活経験をつなげることで、関連する他教科の授業に対する学習意欲も高まると考えた。2回の買い物学習を行ったが、1回目は音楽で使用する楽器のおもちゃを、2回目は図工で使う紙粘土を購入した。音楽では自分の購入した楽器に愛着を持ち、楽しそうに演奏する姿が見られた。図工では自分の好きな色の粘土を購入した為、児童個人個人の個性が前面に現れたケーキの作品を作成することができた。

	7	9	10	11	12
行事		運動会		大塚祭	
はなぐみ たいむ					冬のパーティーをしよう
生活	おでかけしよう① ・セブンイレブンに行こう	おでかけしよう② ・授業に必要なものを買に行こう ・信号機を見よう		おでかけしよう③ ・葉っぱを拾いに行こう ・冬のパーティーの飾りを買に行こう	
国語・算数					
音楽	友だちや先生と一緒に、元気な声や動作で楽しく歌おう！踊ろう！ いろいろな楽器の音を鳴らして遊ぼう！				
図工		素材遊び3 粘土		素材遊び4 自然素材	
体育					

図 II-2 他教科との関係図（はな組）



図 II-3 購入した楽器で演奏



図 II-4 購入した粘土でケーキ作り

(3) 指導と評価

本単元では校外歩行に出かける前に必ず、交通ルールと外遊びの時の約束の確認を行った。本クラスは、板書や全体に提示された絵本などに注目したり見続けたりすることが難しい児童が多い。そのため、外遊びや交通ルールを題材とした絵本をパソコンに取り込み、児童の注目が高まる大型モニタに映し出しながら読み聞かせを行った。同様にモニタとパソコンを用いて、歩行者用信号機を題材としたプレゼンテーションや動画で事前学習を行った。モニタを使用する際には児童の注目を促す為、注目させたい部分をハイライトで示せるポインターを使用した。

実際の歩行では店まで最短ルートで行くと歩行者用信号を一度しか渡れない。知的障害特別支援学校において、教室での学習だけではなく本物の体験的な学習機会は非常に重要であると考え、少し遠回りをすることで、歩行者用信号機を4回通ることができるルートを設定した。買い物学習では、児童の意欲を高めるために一人ずつ財布を準備し、お金を入れて自宅から持ってきてもらうことにした。

評価については歩行中の様子、歩行者用信号を渡る場面、商品を選ぶ場面、商品の受け渡しと支払いをする場面を評価の機会とした。

特に歩行者用信号を渡る場面では、児童の視線が歩行者用信号機に向いているかと、教師の支援を少し遅らせることで自ら一歩目が出るかどうかを重点的に観察した。少しでも視線が歩行者用信号に向いている児童に関しては、ほぼ自ら一歩目を出し信号を渡ることができていたが、視線が向かない児童は歩き出すことができなかった。また視線が向かない児童は、教師がいくら指さしや言葉かけをしても歩行者用信号機に着目することができない様子が見られた。そこで、「信号機を見よう」という新たな小単元を設定し、学習を行った。

教室で行われている事前学習では、全員がモニタに注目し、映し出される歩行者用信号を見ることができているが、実際の場面では着目ができていないことから、そもそも着目するものやその位置がわかっていないのではという可能性が考えられた。ここから児童と同じ位置にいる教師が、児童から距離のある歩行者用信号を指差して着目を促すことは、児童が着目するための支援としては適していないという仮説を立てた。そこで、刺股にフラフープを取り付け、着目する位置を示す教材を作成し、校門前の信号で一人ずつ信号を渡るテストを行った。また、その様子を iPad で録画し、モニタに映し出して一人ずつ振り返りを行った。



図Ⅱ-5 教室での事前学習の様子



図Ⅱ-6 着目する位置を示す

(4) 児童の様子

①指導場面

一人一人がお金を入れたお財布を家から持つてくることで授業に対するモチベーションは非常に高く、首から財布を下げて嬉しそうに登校する児童もいた。

事前学習ではモニタを使用したことで、読み聞かせやプレゼンテーションにしっかりと注目することができていた。また、買い物場面でも前単元の学習の成果もあり、ほぼ全ての児童が自分で支払いを行い、商品を受け取ることができていた。また数名の児童は、支払いからレシートやお釣りを財布にしまうという一連の流れを教師の援助を得ずに行うことができるようになった。

「信号機を見よう」では、歩行者用信号に着目できていなかった児童も、ちらりと視線を信号に向ける様子が見られた。しかし、自分から歩き出すまでは至らなかった為、継続した指導が必要である。

②その他の場面

家庭においても、「一緒に買い物に行って支払いをしてもらいました。」「出かける時に信号を見るように声かけをするようになりました。」「今までは手を繋いで歩いていたのを、少し手を離す場面をもうけて、私（親）の前を歩かせてみました。」といったことが連絡帳などで報告されるようになった。

3学期には、公共交通機関を使って移動する「お別れ遠足」があるため、遠足に向けた事前学習を校内だけではなく、校外で行う機会も設けていきたいと考える。



図 II-7 店内での様子



図 II-8 支払いの様子



図 II-9 信号機を見よう

(文責：II-2-1) 宇佐美太郎、加部清子、環航世)

2) 小学部3・4年(つき組)の授業実践1

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
小学部つき組	生活B	14時間	10月	田中・森澤

1. 単元名

学校周辺の場所を知ろう! ~文京区坂道調査隊~

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	通学を通して、学校周辺を歩いて移動する経験のある児童が多く、おでかけについても好んで取り組む姿が見られる。1学期に取り組んだ宿泊学習においては、教員と一緒に園内を歩くなど、安全に気をつける姿が見られた。一方で、公共施設などの簡単なきまりやマナーについては、さらなる学習経験が求められる。また、経験のある施設の名称を言ったり、地図で調べたりしようとする様子から、経験を重ねることで知識を身に付ける姿もみられる。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	坂道を目指して歩く中で、道路での歩き方や信号の横断など安全に気をつけながら移動することも学習内容として取り入れる。坂道を調べる中で、その周辺地域にも着目する児童の姿も想定される。そのような児童の発見や調べる姿については、iPadやビデオカメラでの撮影を自ら行うことで、帰校後も振り返りできるようにする。また、調べる内容をクイズ形式で確認できるようにしたり、カメラを頭に装着したりするなど、児童の実態に応じて、振り返る学習素材を変更する。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	坂道を目指して歩く中で、道路での歩き方や信号の横断など安全に気をつけながら移動することも学習内容として取り入れる。坂道を調べる中で、その周辺地域にも着目する児童の姿も想定される。そのような児童の発見や調べる姿については、iPadやビデオカメラでの撮影を自ら行うことで、帰校後も振り返りできるようにする。また、調べる内容をクイズ形式で確認できるようにしたり、カメラを頭に装着したりするなど、児童の実態に応じて、振り返る学習素材を変更する。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
<ul style="list-style-type: none"> ・学校周辺の地域に名称があることを知り、関心をもつ。 ・簡単なきまりやマナーを守って、安全に行動しようとする。 ・調査したことをまとめたり、発表したりする。 		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
①[イ(イ)1段階]、②[イ(イ)2段階]、③[イ(イ)3段階] ④[ケ(イ)1段階]、⑤[ケ(イ)2段階] ⑥[コ(イ)1段階]、⑦[コ(イ)2段階]	⑧[イ(ア)1段階]、⑨[イ(ア)2段階]、⑩[イ(ア)3段階] ⑪[ケ(ア)1段階]、⑫[ケ(ア)2段階] ⑬[コ(ア)1段階]、⑭[コ(ア)2段階]	⑮ [1段階] ⑯ [2段階] ⑰ [3段階]

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	文京区は坂道がたくさん!	2	<ul style="list-style-type: none"> ・文京区の坂道について知る。 ・坂道に向けて歩くときの交通ルールやマナーについて知る。
2	文京区の坂道をしらべてみよう	6	<ul style="list-style-type: none"> ・坂道に向けて歩くときの交通ルールやマナー(気をつけること)を確認する。 ・一列に並んで坂道まで歩く。(信号機を見たり、横断歩道を渡ったりする。) ・グループに分かれて、坂道の周辺を調査する。 ⇒坂道の名前や住所を調べる。 ⇒坂道の周りで気になったことについて、iPadを使用し、映像や写真を撮る。 ・一列に並んで学校に戻る。 ・歩く時の様子や調べている様子を映像や写真で振り返る。
3	坂道調査隊の発表をしよう	6	<ul style="list-style-type: none"> ・調べ学習の姿を映像や写真で振り返る。 ・拡大地図に調べた内容や気付いたことを書き入れたり、活動の写真を貼り付けたりする。 ・地図や映像、写真を見ながら、調べた内容を発表する。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
①安全に関わる初歩的な知識や技能を身に付けている。 ②安全や防災に関わる基礎的な知識や技能を身に付けている。 ③安全や防災に関わる知識や技能を身に付けている。 ④簡単なきまりについて関心をもっている。 ⑤簡単なきまりやマナーについて知っている。 ⑥身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などについて関心をもっている。 ⑦身近な社会の仕組みや公共施設の使い方を知っている。	⑧身の回りの安全に気付き、教師と一緒に安全な生活に取り組もうとしている。 ⑨身近な生活の安全に関心をもち、教師の援助を求めながら、安全な生活に取り組もうとしている。 ⑩日常生活の安全や防災に関心をもち、安全な生活をするよう心がけている。 ⑪身の回りの簡単なきまりに従って教師と一緒に行動しようとしている。 ⑫身近で簡単なきまりやマナーに気付き、それらを守って行動しようとしている。 ⑬身の回りにある社会の仕組みや公共施設に気付き、それを教師と一緒にみんなに伝えようとしている。 ⑭教師の援助を求めながら身近な社会の仕組みや公共施設に気付き、それらを表現しようとしている。	⑮教員と一緒に安全に気をつけて移動することを通して、身近な人々、社会及び自然に関心をもち、意欲をもって学んだり、生活に活かしたりしている。 ⑯坂道調査の学習体験を通して、社会及び自然に自ら働きかけようとしていたり、意欲や自信をもって学んだり、生活に活かしたりしている。 ⑰学習したことを振り返ったりまとめたりする発表を通して、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしている。

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数: A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定: A 概ね妥当 B 要検討()
題材: A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定: A 概ね妥当 B 要検討()

(1) 単元の概要

本単元は、小学部3・4年生での生活科の単元である学校周辺の地域を題材として、地域の特徴である坂道の名称を知ることや、学校周辺を歩く際に交通ルールやマナーを守って安全に行動しようとする力を育むことをねらっている。

本学級は、小学部1段階相当の児童から3段階相当の児童まで在籍しており、実態に幅がある。歩行移動については、安全管理の面からも教師と一緒に行動する実態の児童がいる一方で、簡単なきまりやマナーの意味を理解し、それらを守って行動しようとする児童もいるなど、必要な支援の度合いの差が著しい。

本単元前には、「合宿に行こう」という宿泊学習に向けての単元を行った。近年、コロナ禍で学校外で過ごす行事が減り、家族と離れて1日過ごすこと自体が未体験な児童もいる中で、教師や友達と一緒に行動し、公共施設で安全に過ごすことを目標に取り組んだ。教師と一緒に貸切バスを利用する体験、公共の公園内や施設の中を見ながら列に並んで歩く体験を経て、利用した施設の名称を言ったり感想を伝えたりするようになった児童や、「もう1度行きたい」と写真や映像を指さしながら要求する姿を見せる児童、『Google Earth』(Google LLC)で施設を調べる児童など、様々な姿で自分なりに体験を表現することができた。

日常の場面では、登下校やおでかけ等で徒歩移動する経験はあり、好んで取り組もうとする児童が多い。しかし、児童はそれぞれ異なった地域に住んでいるため、自分や友達の住んでいる地域にある場所等を共有することが難しい。そこで、学校の所在地である「文京区」を題材として本単元を設定した。

「文京区」を題材にするにあたり、区の特徴である坂道の多さに着目し、数多くある坂道の中から学校に近い坂道を実際に歩く機会を設定し、その場所や周辺の様子を観察しながら学ぶこととした。実体験を通して、通学時に何気なく歩いている通りや坂道にも名称があることに気付き、その周辺の様子についても興味・関心をもって調べようとする姿をねらった。とりわけ坂道は、登る時に身体にかかる負荷や下る時に感じるバランスの変化といった、平坦な道では感じることの少ない、坂道の歩行ならではの身体的な印象が残りやすい。これらの体験を通して気付いたことを発言したり、ふとした表情や動きで表現しようとしたりする姿にも期待した。調べる際は、iPadや小型カメラを活用することで、実際に歩いた行程を手軽に記録したり、坂道の名称が書かれた看板に注目したりするように促すこととした。

体験後は、『文京ふるさと学習副読本「わたしたちの文京区」』(文京区教育委員会)の文京区の白地図を活用し、身近な場所の名称を探したり、坂道の場所と撮影した写真を合わせたりすることで、地図を扱う体験や地図を通して表現することを学ぶ機会を設けた。最後は、作成した地図を基に、体験で気をつけたことを伝えたり、調べた内容を発表したりする活動を設けることで、学習の達成感を味わえるようにした。

以上の活動を経て、友達と一緒にやる体験的な活動を積み重ね、学級内で表現し合い、学びを共有することを通して身の回りの事物に関心をもてるようになることをねらった。

	7	9	10	11	12
行事	大塚祭				
生活A	 合宿に行こう			 買い物しよう	
生活B			学校周辺の場所を 知ろう! ～文京区坂道調査隊～		
国語			短い文章にふれよう		
算数			いろいろなかたち		くらべよう
音楽					一緒に表現しよう (きつね坂8)
図工			大塚祭の展示 をしよう		
体育			見て聞いて体を動かそう		

大塚祭として関連

「学校周辺の場所を知ろう!」に関連

(2) 他教科との関連

国語では、写真やイラスト、行動について、短い文章（「こたえは〇〇です」、「てをつなぐ」等）で表すことを学んでいる。体験した活動を地図にまとめる際や、その時のエピソードを発表する際に、文章で表現する学習を重ねた。

算数の授業で行った図形「仲間あつめ」の学習で、形や用途、機能に着目した分け方を活かして、坂道の周りに着目することを目指した。「岩、四角！」など触りながら属性や性質を表現する様子が見られた。また、長短や高低などの比較の学習を通して、「〇坂と△坂どっちが長い？」など、実際の体験を思い出して、比べようとする姿も見られた。

音楽では、学習発表会の一環として表現の学習に取り組む際、チーム名を投票で決める活動を行った。アイドルグループに因んで「〇〇坂8」と題し、生活で体験した3つの坂道の名称と「きつね坂」（表現が“きつね”をモチーフにしたダンス）の4つの候補から選んだところ、「きつね坂」に多くの票が集まった。このことから、生活の学習を通して、“名称には意味がある”ことを感覚的に捉えていることが窺えた。また、学習発表場面でも、台詞として「きつね坂～」と発表したり、「きつね坂行ってみたい！」と地図から探そうとしたりする姿が見られ、学習のつながりと広がりを感じることができた。

(3) 指導と評価

学習への手立てとしては、画像を提示することで答えることができたり、2つのイラストから選択して答えることができたりするなど、イラストや画像を提示することは記憶の想起や児童自身の表現を引き出す際に有効であった。また、宿泊に関する事

前事後学習の際にも、映像資料について繰り返し確認したり、発語が少ない児童でも指さしをして思いを伝えようとしたりする姿が見られたことから、選択する手立てとして取り入れた。

児童への評価としては、学校生活のルールとして、目標に向けて自ら学ぶ姿やすずんで係を遂行する姿など、優れた学習の姿が見られた際に、「ポイント」を視覚的に示して評価しており、教師からの評価にポジティブな姿を見せることが増えてきている。そこで、学習のめあてと関連させ、「ちょうさポイント」を示す機会を設けることで、児童の目標に対する学習活動を評価する手立てとして位置づけた。

以上の学習を経て、小単元3次「坂道調査隊の発表をしよう」では、目標に対する評価規準の達成具合を測るため、本校研究紀要第66集を参考に評価基準を設定した。

評価基準の尺度については、下記の3つの基準を設けた。

基準1：未達成。目標・手立ての改善が必要。
基準2：本時の目標を達成した姿。単元としては、今後も目標を継続していく。
基準3：本時の目標を超えた姿、今後の目標を検討する。

また、指導案の中で評価する活動を明確化し、その時の行動を基に評価できるように、行動で評価できるよう表記を工夫した（表Ⅱ-4）。

表Ⅱ-4 評価基準の例

自分たちが調べた坂道について、その名称や場所、気付いたことについて発表することができたか。

目標	児童	基準1	基準2	基準3
⑬ 教師と一緒に坂道の名称や場所を発表する。	D	写真/映像を見ていない。 発表しない。	調べた坂道の名称を言っている。	地図を参考に、調べた坂道の名称や調べたものの名称を言っている。
	E	写真/映像を見ていない。 発表しない。	調べた坂道の写真を 選択して、伝えている。	地図の中から、自らが発表する坂道の写真を 選択して、発表している。
	H	写真/映像を見ていない。 発表しない。	調べた坂道の写真や 名称を選択して、伝えている。	地図の中から、自らが発表する坂道の写真 や文字を選択して、発表している。

（4）児童の様子

①指導場面

通学路としていずれかの坂道を歩く児童や、『Google Earth』で調べると「知ってる！」という児童であっても、1次の事前学習や、2次の1回目体験の段階では、「坂道に名前（名称）がある」ことについて、イメージをもつことが難しい様子が見受けられた。例として、1回目体験の様子を紹介する。



図Ⅱ-11, 12, 13 坂道調査の様子

調査する坂道は『牛坂』で、周辺には『牛天神』や狛牛があるなど“牛”にまつわるものが多く確認でき、それぞれ見つけて撮影する姿が見られる。しかし、体験後の振り返りでは、“牛”坂と“牛”天神で同じ“牛”という名称が入っていることについて気付かない様子があった。これは、地名と地名にまつわる事物とのつながりに気付いていないことが窺える。

これらを踏まえ、その後の体験では、信号機やバス停など、体験する坂道の名称に注目できるように教師が言葉かけしたり、安全やきまりを守る姿について即時にフィードバックをしたりするよう心掛けた。さらに、登る時に身体にかかる負荷や下る時に感じるバランスの変化を感じ取りながら、イラストを交えて坂道の上下について確認したり、写真や動画ですぐに振り返ったりすることを通して、坂道や名称に対する意識を高め、学習内容の定着を促した。



図 II-14 坂下の確認

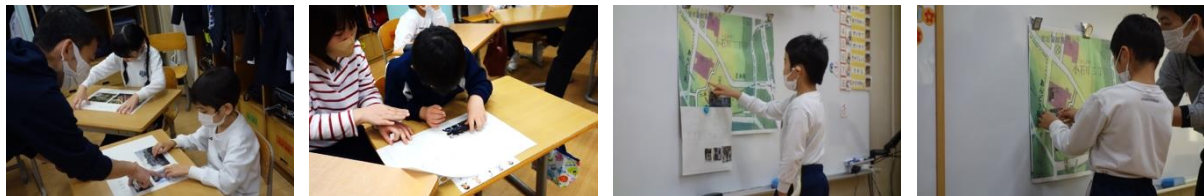


図 II-15, 16, 17, 18 発表原稿、地域マップづくり

体験後の3次前半では、発表する坂道ごとにチームで発表原稿と地域マップづくりを行った。原稿には、坂道の名称、場所（住所）を記入したり、その坂道にまつわる印象的な写真や画像を貼ったりすることで、内容を関連させやすくした。また、地図上に書かれた同じ地名を確認し、その場所の写真も貼り付けることで、関連付けた。



図 II-19, 20, 21, 22 発表の様子

3次後半では、上記作成したものを基に発表することを通して、これまで学習した内容について、調べた坂道の名称や場所、気付いたことについて発表することができた。また、きまりに関する内容を選んだり伝えたりすることもできた。内容やきまりに関して特徴的な姿が見られたのは、B児とC児である。

表 II-5 B児、C児の評価基準

調査で気をつけることについて、知っていることを選んだり伝えたりすることができたか。

目標		基準1	基準2	基準3
⑤ 調査で気をつけることについて、理解する。	B	調査で気をつけたことについて答えない。場面にそぐわない発言をしている。	原稿に沿って、調査で気をつけたことについて発表している。	調査で気をつけたことについて、身振りをつけたり実演したりしながら発表している。

自分たちが調べた坂道について、その名称や場所、気付いたことについて発表することができたか。

目標		基準1	基準2	基準3
⑥ 坂道で調べたものについて、興味をもつ。	C	写真/映像を見ていない。発表しない。	調べた坂道の写真/映像の中から、興味のあるものを見ている。	写真/映像に出てくる言葉を聞き、真似て言っている。

B児は、動画を見ながら、信号機を渡る際のきまりについて実演するなど、気をつけることについて率先して取り組もうとする姿が見られた。C児は、他児の発表を聞きながら、「電車くるかな〜？」と発言をするなど興味をもって取り組む姿が見られた。このような児童の行動については、評価基準3にあたることを確認すると同時に、そのような姿についての評価を蓄積していくことで、今後の評価の妥当性を高めることにつながると考える。

②その他の場面

今回の授業を経て、日常生活の場面においても、坂道の看板表示を読んで、「富坂下って書いてあるのを見たよ！」と報告したり、「友達はどの坂道を通ってきているのかな？」と登下校の道のを気にしたりする姿が見られるようになった。さらにC児は、「お散歩いこうか！」と言うことが増え、これまで難しかった公共交通機関を利用した登校にもチャレンジするようになった。これらの実践をふまえ、『小学部 生活科で育みたい力』に沿って考察すると、今回の学習体験が、興味関心を広げ、習慣や知識を身につける機会になったことで生活の質が高まる体験となったことが窺える。また、現在は「教師と一緒に」が必要な1段階相当の児童も、他者との関わりの中で学習を深めることで、「誰とでも」という将来のキーワードにつながると考える。さらに、今後社会との関わりを深め、身の回りにあるもののしくみを知り、きまりを守って安全に生活することで、徒歩圏内での生活から公共交通機関等を利用した生活圏の広がりへと寄与すると考える。

つき組授業実践2では、主にこの公共交通機関の中から、コミュニティバスの乗り方や利用する際のマナーを学ぶこととし、生活圏の広がりについて体験を通して実感しながら学ぶこととした。

(文責：Ⅱ-2-2) 田中翔大、森澤亮介、兼子南)

3) 小学部3・4年(つき組)の授業実践2

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
小学部 3・4年/つき組	生活科	13時間	1・2月	森澤・田中・兼子

1. 単元名

マナーを守ってBーぐるバスに乗ろう

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	学校周辺地域の特徴である「坂道調査」の学習を通して、3学期の校外学習への期待感が高まっている。登下校に公共交通機関を利用しており、電車やバスなど乗り物に興味を示している児童もいる。1学期の宿泊学習では、貸し切りバスで移動したため、集団で公共交通機関を利用した経験は少ない。令和4年度つき組では、小学部1段階相当の児童から3段階相当の児童まで在籍しており、実態に幅がある。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	他の乗客がいる中で、運賃の支払いやマナーを細かく指導していくことは困難であると考え、実際に地域のバス運行会社と協力し、乗り方や運賃の支払い方を知り、適切な着席の仕方などのマナーを守る経験をする。また、写真や動画を活用しながら、マナーを守る姿について振り返ることができるようにする。さらに、学習内容の振り返りに、児童の実態に応じたワークシートを記入し、しおりにまとめる活動を設定する。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	本単元を通して、移動支援者などの様々な人と公共交通機関を利用できるようになってほしい。また、公共交通機関利用時のマナーやきまりがあることを知り、学習したマナーが、様々な場面で活用できることに気がつくと考え。マナーを守ることは他者にとっても有意義であり、安全に公共交通機関を利用することの意識を高められるようにしていきたい。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
バス乗車体験活動を通して、乗車方法やマナーを知り、マナーを守りながら安全に公共交通機関を利用する姿		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
ケ(イ) ①1段階 ②2段階 ③3段階 コ(イ) ④1段階 ⑤2段階 ⑥3段階 オ(イ) ⑦1段階 ⑧2段階	ケ(ア) ⑨1段階 ⑩2段階 ⑪3段階 コ(ア) ⑫1段階 ⑬2段階 ⑭3段階 オ(ア) ⑮1段階 ⑯2段階	⑰1段階 ⑱2段階 ⑲3段階

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	校外学習のしお리를つくる	1	・スライドを見て、校外学習までの見通しをもつ。 ・しお리를つくることを知る。
2	Bーぐるバスでのマナーを考えよう	2	・これまでの生活経験やバスの乗車マナーの動画を視聴し、Bーぐるバスを利用する際の3つのマナーを知り、考える。 『荷物を膝にのせて座る。』『手すりをもつ。』『バスの中では静かにする。』
3	Bーぐるバスに乗ってみよう	2	・Bーぐるバスの中で、乗車体験や運賃の支払い体験、マナーを守っている動作をする。 ・また、その姿を動画や写真で撮影し、振り返る。
4	大きな声ってどのくらい?	2	・騒音計を使用して教室周辺や自分の声の音量を計測する。 ・静かにする際の合図を決めて、写真撮影をする。
5	時間と場所を確認しよう	1	・校外学習の予定を改めて確認し、乗車・降車場所や時刻を確認する。
6	おつか Bーぐるバスに乗ろう	2	・発表活動を通して、これまでに学習したマナーを答えたり、表現したりする。 ・運転手さんが「安全運転」ができる行動を考えたり、表現しようとしていたりする。
7	きつね坂へ行こう	3	・Bーぐるバスを利用して、きつね坂に行き、坂道調査を行う。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①簡単なきまりについて関心をもっている。 ②簡単なきまりやマナーについて知っている。 ③簡単なきまりやマナーに関する知識や技能を身に付けている。 ④身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などについて関心をもっている。 ⑤身近な社会の仕組みや公共施設の使い方などを知っている。 ⑥日常生活に関わりのある社会の仕組みや公共施設などを知ったり、活用したりしている。 ⑦身の回りの人との関わり方に関心をもっている。 ⑧身近な人との接し方などについて知っている。	⑨身の回りの簡単なきまりに従って教師と一緒に行動しようとしている。 ⑩身近で簡単なきまりやマナーに気付き、それらを守って行動しようとしている。 ⑪日常生活の簡単なきまりやマナーが分かり、それらを守って行動しようとしている。 ⑫身の回りにある社会の仕組みや公共施設に気付き、それを教師と一緒にみんなに伝えることができる。 ⑬教師の援助を求めながら身近な社会の仕組みや公共施設に気付き、それらを表現している。 ⑭日常生活に関わりのある社会の仕組みや公共施設が分かり、それらを表現している。 ⑮教師や身の回りの人に気付き、教師と一緒に簡単な挨拶などを行っている。 ⑯身近な人を知り、教師の援助を求めながら挨拶や話などを行っている。	⑰Bーぐるバスの乗車体験を通して、公共交通機関の利用に関するルールやマナーに関心をもち、意欲をもって学んだり、生活に生かそうとしていたりしている。 ⑱Bーぐるバスの乗車体験を通して、公共交通機関の利用に関するルールやマナーに関心をもち、意欲や自信をもって学んだり、生活に生かそうとしていたりしている。 ⑲Bーぐるバスの乗車体験や運転手の気持ちを考える学習を通して、公共交通機関の利用に関するルールやマナーに関心をもち、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとしていたりしている。

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数:A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定:A 概ね妥当 B 要検討()
題材:A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定:A 概ね妥当 B 要検討()

(1) 単元の概要

本クラスの児童は、入学してからこれまでの社会情勢の影響により学校集団で公共交通機関を利用した経験が少ない。また1学期に取り扱った「合宿へ行こう」では、移動手段として貸し切りバスを使用したため3学期のお別れ遠足等の公共交通機関を利用する行事を見据え、公共交通機関を利用する上でのマナーについて学習する単元として設定した。

本単元を通してマナーを守って安全に公共交通機関を利用できる姿を目指しつつ、マナー学習を通して自身だけでなく周囲の人へ関心をもち、他者の思いにも気がつくことができるようになってほしい。

1次から2次では、「学校周辺の場所を知ろう！」で学習したきつね坂へバスを使って行くことを知り、公共交通機関を利用する上でのマナーについて学習する。動画を活用しながら自身がマナーを守っている姿を自ら振り返ることで、「他者からどう見えるか」「マナーを守った際の気持ち」「公共交通機関を利用している他者がどう思うのか」について触れることとした。

3次では文京区のコミュニティバス（Bーぐるバス）を運行する会社の協力を得て、実際の車両を使い運賃の支払い方法、2次で学習したマナーを守っている様子を写真や動画で撮影した。またバスの運転手へのインタビューを通して「安全」と「マナー」の関係について考える機会とした。

4次では騒音計を用いて子どもたちの声の大きさを測ったり、騒がしくなってしまった場合に、静かにする合図を考えたりすることを通して、「静かにする」という抽象的な概念に触れ、行動するきっかけとした。

5次から6次では校外学習の時間や降りるバス停を確認し、教室前廊下にバスを模した座席を設置し、学習したマナーについて実際に表現する機会とした。

7次では校外学習を通してマナーを守ることができたのか振り返りつつ、お別れ遠足で利用する予定の公共交通機関でも学習したマナーは有効であるのかを考える機会とする。

本単元を通して、周囲の人への関心をもち、関係性を広げながら誰とでもマナーを守って公共交通機関を利用できる姿につなげられるようにしたい。

(2) 他教科との関連

マナーを学習する上で、個々の立ち居ふるまいが周囲へ与える影響について知ることが必要であると考える。しかし知的障害を始めとした障害特性により、自分の行動が相手へ与える影響を推し量ったり、他者がどう思うかを理解したりすることは困難が伴う。

	7	9	10	11	12	1	2	3
行事	大塚祭							
生活A								
生活B								
国語								
算数								
音楽								
図工								
体育								

本単元で取り扱った内容と特に関連が深い他教科の単元

図Ⅱ-23 本単元における他教科との関連

そこで今年度の国語では「短い文章にふれよう」という単元で「きもち」を表情を表す言葉（うれしい・かなしい等）とオノマトペ（ニコニコ・シクシク等）を取り扱っており、そこで学んだ内容を他者の気持ちを理解することへとつなげられるように計画した。

また公共交通機関の車内では「静かにする」ことが求められる。こちらも障害特性により抽象的な概念を理解することが難しい。算数では「大きい小さい」など比較の概念を取り扱ってきたため、これらの学習内容を音量の大小と結び付けられるように計画した。

（３）指導と評価

マナー学習の中で難しいのは、実際の中で指導をすることであるとする。特別支援学校学習指導要領解説内の知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本（7）にも「生活に結びついた具体的な学習活動を中心に据え、実際的な状況下で指導するとともに、できる限り児童生徒の成功経験を豊富にする。」とある。マナーを指導する上でよく利用されるのは、校外学習の中に公共交通機関の利用を組み込み、実際に利用しながら指導することが多いのではないだろうか。しかしそこでは他の利用者もいるため、十分な指導の時間が取れない、即時のフィードバック等が難しい、子どもの行動を制止する指導が多くなるなどの懸念が考えられる。

そこで本単元では、実際のバスを学習場面としマナーについて学習する時間を設けた。加えてバスの運転手へインタビューを実施することとした。マナーを守る理由や気持ちについてバスの運転手から直接聞く学習活動により、他者の気持ちを聞こうとし、確認することがマナーを守ろうとする態度をより一層養うことへとつながるのではないかと考えた。

評価に際して実践1を参考に評価基準を設定した。実践1では児童ごとに3つのレベルを設けて評価基準を作成したが、実践2では単元目標ごとに基準を作成した。

表Ⅱ-6 評価基準の例（一部）

目標：B—ぐるバスでの3つのマナーを答えたり、動作で表現したりする。

基準1	基準2	基準3	基準4
注目しない。 言葉かけに応じない。	教員が提示したしおりやスライドを見て、声を出したり、手さしをしたりしている。	しおりやスライドを手がかりにして、マナーについて、言葉や動作で答えている。	しおりやスライドを手がかりに、マナーを答え、動作で表現している。また、その理由について答えている。

基準1：評価規準に迫る様子が見られない姿。目標・手立ての改善を行う。

基準2：1段階の目標を達成したと想定する姿。

基準3：2段階の目標を達成したと想定する姿。

基準4：3段階の目標を達成したと想定する姿。

（４）児童の様子

①指導場面

初回の指導では、「バスに乗車して、きつね坂に行く」ことが学習の動機づけとなってい

一方で、児童にとって乗車マナーを学習すること自体は特に興味を引くものではなく、乗車マナーの動画等を活用してもマナーの内容を答えることは難しい様子が窺えた。そこで児童が実際に荷物を膝にのせて座る、手すりを持つといったことを実際に演技することを通してバスの乗車マナーを学習する見通しを持つことができたと考えられる。



図Ⅱ-24 座り方の演技・教室での学習の様子

実際に「Bーぐるバス」が来ることは、学習に見通しをもつ数名の児童の保護者との連絡帳のやり取りからとても楽しみにしていたことが窺えた。バスを利用した体験学習では、①運賃の支払い、②学習したマナーの写真撮影、③運転手へのインタビューの3つの活動を行った。実際に撮影した個々のマナーを守っている姿を教材に使用することで、子どもたちが興味を持って画面や印刷した写真に注目することができるようになった。



図Ⅱ-25 運賃の支払い体験 学習したマナーの写真撮影

「バスの運転手さんへ気持ちをきこう」というインタビュー活動を通して、「(マナーを守ると)優しい気持ちになる。」といった他者視点の思いに触れることができたのは有意義であった。学習に見通しを持つことができる3名の児童は、インタビュー後にマナーに関する各場面での気持ちについてスムーズに答えることができるようになった。



図Ⅱ-26 運転手へのインタビューの様子

②その他の場面

7次できつね坂に行くことや、お別れ遠足で都バスや電車などの公共交通機関を利用する機会がある。学校の活動内で子どもたちが本単元で学習した内容をどのように表現するのかを確認し単元全体としての評価をする。7次でBーぐるバスを利用した際には、教員の言葉かけで全員が荷物を膝にのせて座ることができた。また他の乗客もいる中、座れなかった児童は手すりをもって乗る姿も見られた。



保護者に学習内容や指導方法と学習成果を合わせて伝え 図Ⅱ-27 7次 Bーぐるバスの利用
 することを通して、日々の登下校における行動の変化も評価していくことが大切だと考える。

(文責:Ⅱ-2-3) 森澤亮介、田中翔大、兼子南)

4) 小学部5・6年(そら組)の授業実践

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
小学部そら組	生活	23時間	10~12月1~2月	高津

1. 単元名

学校の周りを探検しよう

2. 単元の構想

(1) 学習者の 興味・関心 (児童・生徒観)	児童の実態は、小学部2段階、3段階程度である。児童の多くは、これまで校外学習や家庭のお出かけにより外出の経験があり、校外での活動に対しては大きな期待感を持っている。1学期に実施した宿泊学習では、公共機関の使い方、施設の過ごし方、買い物などの経験をしたが、個々の細かいスキルについては、経験も少なく学習中である。また、宿泊学習を通して、活動場所を地図に表すことに強い関心を持っていたことから、校外での体験を振り返り定着を促すためのツールの一つとなると考えた。 前単元である「学校を探検しよう」では、馴染みのある学校の探索活動を行い、児童が自分の知っているものを想起したり考えたりしながら、「〇〇を見つける」「〇〇について知りたい」という目的や問いをもって活動することができた。また、慣れ親しんだ場所での活動を通して、きまりやルールを学習した。
(2) 学習活動・教材 (単元・題材観)	前単元から更に、学校外の活動へと範囲を広げ、普段生活をしている地域や、まだ行ったことのない施設などで活動し、今まで見逃していたことや新しいものへの気づきを促したり、働く人々の存在に触れ、人のかかわりを学ぶことで、日常の事象に関心を持つきっかけとなると考える。そこで、地域や宇宙、消防署など、他教科で関心を持った事象を絡めながら、知っているものや自ら予想したことを探したり調べたりする活動を設定することで、「知っている」から体験的な「わかった」へ、そして「もっと知りたい」という意欲につながるようにする。さらに、iPadやカメラ等で児童自身が写真や動画などを撮影し活用する機会を設けることで、考えたことの言語化を補助したり、情報の多様な共有の仕方を学んだりできるようにする。通学路を含んだ学校の周りで友達とともに楽しみのある体験的な活動を重ねることで、そこで学んだルールやマナーが日常生活においても定着することを期待する。
(3) 単元の 意義・展望 (指導観)	きまりやマナーを守りながら、教師や友達や地域の人、身の回りの設備、行き先の施設などに興味関心をもって過ごし、活動に自ら取り組もうとしたり、やりたいという気持ちをさらに広げ、それを表出することをねらう。また、事前の「計画」と校外での「探検」、写真や動画、地図を活用した「振り返り」を繰り返すことで、自ら予測を立ててそれを調べ、その結果や理由を考えるという社会的な学びの素地を作ることをねらう。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
安全やきまりに気を付けて活動しながら、身の回りのもの・ことに気付き自ら考え、もっと知りたいという意欲をもつ。		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
① [イ(イ)2段階] ② [イ(イ)3段階]	⑨ [イ(ア)2段階] ⑩ [イ(ア)3段階]	⑮ [2段階] ⑯ [3段階]
③ [オ(イ)2段階] ④ [オ(イ)3段階]	⑪ [オ(ア)2段階] ⑫ [オ(ア)3段階]	
⑤ [ケ(イ)2段階] ⑥ [ケ(イ)3段階]	⑬ [ケ(ア)2段階] ⑭ [ケ(ア)3段階]	
⑦ [コ(イ)2段階] ⑧ [コ(イ)3段階]	⑮ [コ(ア)2段階] ⑯ [コ(ア)3段階]	

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
1	牛坂・後樂園・富坂コースを調べよう	4	・地図や航空写真を見て、学校の周りがある施設などを知る。 ・「地図」が何を表しているか、何がわかるかを知る。
2	博物館へ行こう～宇宙ミュージアム～	3	・絵本や地図などを見て、学校の周りにありそうなものや施設を考えたり選んだりして、探検カードを作る。 ・「たんけんのおやくそく」(ルールやマナー)を確認しながら、安全に歩く。
3	安藤坂・春日通りコースを調べよう	3	・学校の周りを散策し、選んだものを見つけて写真に撮ったり、数えたりする。 ・写真を撮るときに、店や施設の人に声をかけ確認をする。 ・動画を見ながら見つけたものや場所を振り返ったり、理由を考えたりしながら、地図に写真やイラストを貼る。
4	消防署に行こう～文京区の安全～	4	・知りたいことや調べたいこと、聞きたいことを考える。 ・消防士の話を聞き、施設内や消防車を見たり、はしご車に乗る体験をしたりする。・消防士に質問をする。 ・体験したことを振り返る。 一國語で消防署に手紙を書く ・乗車のマナーを守ってバスを利用する。
5	お店を調べよう	4	・学校の周りがある店を、Google Mapで調べる。 ・友達と話し合い、調べたいお店や調べたいことを考えて、探検の計画書や探検カードを作る。 ・店を見学したり写真を撮ったり、店員に質問をしたりしながら、探検カードに記入する。 ・探検カードをもとに調べたことをまとめて発表する。
6	カップヌードルを調べよう～商品ができるまで～	3	・カップヌードルを購入して調理して食べる。 ・商品について知りたいこと、調べたいことを考える。 ・商品ができるまでの過程を見たり、流通、歴史に触れたり、商品づくりの疑似体験をしたりする。
7	探検を振り返ろう	2	・これまで学習してきたコースや施設について、振り返る。 ・写真を見たり、調べたことを発表して感想を伝え合う。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①安全や防災に関わる基礎的な知識や技能を身に付けている。 ②安全や防災に関わる知識や技能を身に付けている。	⑨身近な生活の安全に関心を持ち、教師の援助を求めながら、安全な生活に取り組もうとしている。 ⑩日常生活の安全や防災に関心を持ち、安全な生活をするよう心がけている。	⑰学習の流れをとらえ、自分のことに取り組もうとしたり、教師や友達、行き先の施設などに対し自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活に生かそうとしたりしている。
③身近な人との接し方などについて知っている。 ④身近な人との簡単な応対などをするための知識や技能を身に付けている。	⑪身近な人を知り、教師の援助を求めながら挨拶や話をしようとしている。 ⑫身近な人と自分との関わりが分かり、一人で簡単な応対などしようとしている。	⑱学習の流れをとらえ、自分のことに取り組もうとしたり、教師や友達、行き先の施設などに対し自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとしていたりしている。
⑤簡単なきまりやマナーについて知っている。 ⑥簡単なきまりやマナーに関する知識や技能を身に付けている。	⑬身近で簡単なきまりやマナーに気付き、それらを守って行動しようとしている。 ⑭日常生活の簡単なきまりやマナーが分かり、それらを守って行動しようとしている。	
⑦身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などを知っている。 ⑧日常生活に関わりのある社会の仕組みや公共施設などを知ったり、活用したりしている。	⑮教員の援助を求めながら身近な社会の仕組みや公共施設に気付き、それらを表現しようとしている。 ⑯日常生活に関わりのある社会の仕組みや公共施設が分かり、それらを表現している。	

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数: A 概ね妥当 B 要検討(ただし、単元を分けることを検討する)	目標設定: A 概ね妥当 B 要検討()
題材: A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定: A 概ね妥当 B 要検討()

(1) 単元の概要

本単元は、自分の身の回りの地域や公共施設等の散策と調べ学習、公共交通機関の活用、地域で働く人とのかかわりを通して、日常生活における社会の仕組みに関心を持つことをねらって設定した。また、活動の際には、これまでに学習したルールやマナーについて繰り返し確認し、地域の生活の中で周囲と心地よい関係を築くための力を育むことをねらっている。身の回りの設備や事象から徐々に範囲を広げ、地域の安全や販売や商品の生産・流通などに触れながら、中学部社会科への「イ 公共施設と制度」「ウ 地域の安全」「エ 産業と生活」へつなげる学習としている。

1次から3次は、自分が選択した設備等を友達と協力して見つけ、集めていくという活動を通して、普段歩いている道には様々な設備があることに気付くことをねらい、学校の周りにある物(施設や店、標識や地形、ポストや掲示板など)を選んだ探検カードを作成した。「あった!」「知っている!」という達成感を通し、身の回りの設備等や事象に自ら働きかけ、さらに新しい発見をしたいという気持ちを育めるよう、機会を設定した。1次では児童全員が同様の設定で調べ学習を行ったが、3次では3段階相当の児童については、「たくさんあると思うもの」を選んでその理由を考えて自分で仮説を立て、物の数え方や表の作り方など算数での学習を活用しながら、調べ学習を行うようにした。

4次は、1次における児童の「消防車だけ見つけられなかった」というエピソードや、3次における「消火栓や消火器がたくさんあった」というエピソードを活用し、それがなぜなのかを考えることを切っ掛けに、消防署見学に行くことを計画した。国語の学習で消防署や消防士、消防車などについて本で調べることを通して、知りたいことや見たいこと、質問を改めて考えて、自分なりの問いをもつことを促した。また、見学や消防士とのやり取りを通して安全や防災に意識を向け、普段行っている避難訓練とのつながりに気付いたり、自分だったらどうするかについて考えたりする機会とした。

5次は、前半の単元で児童全員が高い興味関心を持っていた「お店」をテーマに挙げ、学校の周りにはどのような店があるのかをGoogleマップで調べた後に、店を選んで実際に調べに行く活動を設定した。友達とチームになって探検の計画を立て、役割分担をしながら調べ学習をすることで、店の種類や商品、働く人やその仕事について知る機会とした。



図 II-28 たんけんのおやくそく



図 II-29 消火栓を発見



図 II-30 探検の振り返り



図 II-31 消防士への質問



図 II-32 お店探検の計画



図 II-33 本屋にインタビュー



図 II-34 学校の周りのお店地図

6次では、商品の生産過程や流通や歴史に触れることをねらいとして、児童全員が好んでいる「ラーメン」を題材に、商品の特徴を調べたり、カップヌードルミュージアムを見学し製造過程等を体験したりする機会を設けた。

7次において、これまでの学びの総括を計画しているが、それぞれの小單元において「計画」「探検（調べ学習・体験）」「振り返り/発表会」を行っている。「何があるか」「なぜなのか」等を予め考えて自分なりの仮説を立て、それを探しに行ったり調べたりする活動と、それを振り返って言語化し友達と共有する活動を繰り返すことで、自ら考えて調べようとする力や、地域にある様々な公共施設等への関心を高めることをねらいとしている。

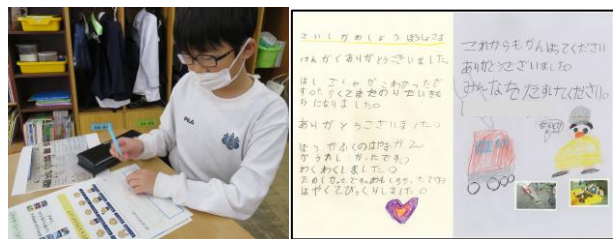
(2) 他教科との関連

11月に実施した「大塚祭」では創作劇を演じた。この劇のシナリオや構成に関するテーマや題材としての横断に合わせ、各教科で学習された見方・考え方が物語理解や演技において発揮されると考え、本單元もその一部となっていた(図Ⅱ-37 黒枠部分)。

本單元では、主に「算数」「国語」で学習した見方・考え方を働かせて、学習を進めている(図Ⅱ-37 グレー部分)。算数において身に付けた、数量や形などを捉えたり比べたりする力を発揮して散策活動や調べ学習を行っているほか、国語において、絵本や簡単な図鑑を通して触れた、自分がいる場所の表現の仕方や施設や店などの名称や簡単な仕組み、また、調べたことや疑問に思ったことを言葉にする力、周りの人と言葉でやりとりをする力を発揮し、施設見学や質問のやりとりを行っている。



図Ⅱ-35 [国語] 本で調べよう



図Ⅱ-36 [国語] 手紙を書こう

月	7	9	10	11	12	1	2	3
行事	運動会		大塚祭		お楽しみ会		お別れ遠足	
生活A	みんなであそぼう (輪ゴムで遊ぼう: ロケットづくり)		大塚祭に向けて					
生活B	学校を探検しよう		学校の周りを探検しよう ①牛坂・後楽園・富坂コースを調べよう ②博物館へいこう ③安藤坂・春日通りコースを調べよう		④消防署に行こう ⑤お店を調べよう ⑥カップヌードルを調べよう		⑦探検を振り返ろう	
国語	えほんをよもう 「おむすび ころりん」	えほんをよもう 「ぼくのいま いるところ」	大塚祭のおはなし おむすび ころりん どこへいく		本で調べよう	手紙を書こう	えほんをよもう 「おみせやさんて くださいな!」	
算数	いろいろな かたち	くらべてみよう はかってみよう (学校の〇〇しらべ)	いっしょに 演奏しよう (きらきら星 ・宇宙の音)		いろいろなかたち (学校の かたちしらべ)			
音楽	ランプをつくらう							
図工								
体育			身体を動かし続けよう (ダンス:地球とおどろう)					

「学校の周りを探検しよう」に関連した單元

「大塚祭」に関連した單元

図Ⅱ-37 他教科との関係図(そら組)

(3) 指導と評価

単元全体を通して、3段階相当の題材を設定し、友達との協同活動を通して全児童がその内容に触れられるようにしている。一方で、児童の実態に応じて2段階の内容に取り組めるような機会および教材の設定と、個別支援を行った。また、各児童の学びやすさを考え、iPadでの検索や記録方法の提案やカメラ機能の使用、選択肢イラストの提示など教材教具を工夫した。



図Ⅱ-38 自分で選ぶ・自分で探す

単元前半は、児童が自分の考えを表現したり確認したりできるように、一人一人が自分の探検カードを作って散策活動をした。その後、撮影係の児童がウェアラブルカメラで撮った動画を見ながら、その場にあった設備等を言葉で表現したり自分で撮った写真を表示したり、カードを指したりしながら、児童が自分の成果を表現し友達と共有し合えるよう、振り返り場面を設定した。



図Ⅱ-39 探検カード

後半のお店探検では、チームになった友達と一つの計画書を作成し、役割を担いながら一緒にシートを完成するように設定した。各児童が得意なことやできることを活かした役割を担えるよう促したり、選びやすい選択肢を用意したりすることで、友達とやりとりをする中で自分の力を発揮しながら、共通の目的に向かって参加できるようにした。



図Ⅱ-40 お店探検 計画書・探検カード

表Ⅱ-6 目標の評価機会・基準一覧

評価については、小単元ごとに評価規準に該当する活動内容を選定し、その場面において観察された児童の姿を評価レベルに照らし合わせて評価するようにした(表Ⅱ-6)。しかしながら、生活科の学習の評価については、単元全体でついた力として評価することや、生活全般としての総合的な評価が必要であり、その一場面での行動レベルによる評価のみでは不十分であると考えられる。そのため、授業全体を通して表出された児童の発言や行動とその内容、学校や家庭など日常生活において発揮するようになった姿などをエピソードレベルで集めたものも合わせて、評価を行った。

該当する小単元	活動内容(評価場面の形状)	評価規準
1 2 3 4 5	信号の名称とルールを答える	①
1 2 3 4 5	店員や施設の人への挨拶方やあいさつの仕方について答える	③④
2 4 5	教師の問いに対して、公共施設でのマナーを答える	⑤⑥
1 3	様々なマークやその名称に細心をもち、言葉や身振りで表現する	⑦⑧
1 3	いくつかの標識に興味を持ち、名称や意味を答える	②
1 3 4	実物を見て、バス・電車・タクシーなどの乗り物の名称を言う	⑦⑧
4	目的地までの交通機関を調べたり想像して答える	②
4	「火事」「地震」「避難」の言葉や絵を答える	①②
4	消防署について知りたいことを考えて質問を準備する	⑦⑧
5	消防署の名称や仕事を知りたいことを考えて答える	②
5	いくつかの店について、そこで扱っている商品を言う	⑧
5	カッパラーメンについて知りたいことを考えて答える	⑧
1 3 5	学校の周りに見つけたもの・場所・施設等を選ぶ	⑦⑧
3	学校の周りに多くあると思うものを選ぶ(たんけんカード)	⑦⑧
3	学校の周りであると思う理由を考えて、言葉や単語で表現する	⑧
1 2 3 4 5	自分の家や身近な地域との違いや同じところがあるかを考えて表現する	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	自動車や自転車を避けたりぶつからないように歩く	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	信号を守って横断する	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	信号が青になったあと、左右を見てから渡る	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	「人にちは」「ありがとうございます」のあいさつをする	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	「写真を撮っていますか?」と確認をする	⑧
2 4 6	静かに歩いて行動する(公共施設でのまわり)	⑦⑧
2 4 6	静かに歩く(公共施設でのまわり)	⑦⑧
2 4 6	順番を守る(公共施設でのまわり)	⑦⑧
4 6	順番を守ってバスや電車を乗降する	⑦⑧
4 6	バスの支払い(バス)をする	⑧
4 6	バスの路線ボタンを適切に扱う	⑧
2 4	電話をする(弁当の注文をする)	⑧
1 3	たんけんカードをもとに、見つけたもの・場所・施設をチェックする。	⑦⑧
1 3	友達が探しているものを見つけて伝える	⑧
1 2 3 4 5 6	見つけたもの・場所・施設を写真に撮る	⑧
1 2 3 4 5 6	土地の特徴や学校の周りのものなど、興味を持ったことや気づいたことを言葉や身振りで表現する	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	店や施設の特徴など、興味を持ったことや気づいたことを言葉や身振りで表現する	⑦⑧
2 4 5	消防署の施設や仕事を聞き、知ったことや気づいたことを言葉や身振りで表現する	⑦⑧
2 4 5	カッパラーメンの作り方や工場の様子、歴史など、気づいたことを言葉や身振りで表現する	⑦⑧
1 2 3 4 5 6	店員や施設の人への挨拶方やあいさつの仕方について答える	③④
1 2 3 4 5 6 7	(体験したことや出来事や感想等を伝える)	⑦⑧
1 2 3 4 5 6 7	施設の名前や、そこに何ががあるかを答える	⑦⑧⑨
2 4	「火事」「地震」「避難」の言葉や絵を答える	①②
3 4	火災報知機や消火器等の非常用設備の用途や必要な場面を言う	⑤⑥
3 4	火災報知機や消火器等の非常用設備の名称を答える	⑤⑥
4	安全に生活するために必要なことを1つ以上言う	②
5 7	いくつかの店の名称を答える	⑦⑧
5 7	いくつかの店について、そこで扱っている商品を言う	⑧
1 3 5	動画を撮り、その場面で撮影した写真をモニターに映す	⑦⑧
1 2 3 4 5 6 7	写真を見て、そのもの・場所・施設等の名称を答える	⑦⑧
1 3 5	地図に見つけたもののイラストを貼る	⑦⑧

評価レベル	1	2	3	4	5
評価された姿	評価規準に迫る様子が認められない ・行おうとしない ・機会なし	実際に行動し達成可能と考えられる姿(1段階) ・目標を向ける ・行おうとする ・教員と一緒に行動(身体ガイダンス等)	2段階の目標を達成したと想定する姿 ・教員を模倣して言葉や動作で表現する ・選択肢から選ぶ ・教員に依頼して一緒に行動	3段階の目標に接近したと想定する姿 ・言葉やジェスチャーなどの仮し)を受けて行う ・選択肢を手がかりに自分の言葉で答える	3段階の目標を達成したと想定する姿 ・想起して答える ・言葉や動作で具体的に表現する ・自発的に取り組む

(4) 児童の様子

①指導場面

「探検」というテーマに対し、どの児童も意欲的に取り組む様子が見られた。校外に出る際には、毎回「たんけんのおやくそく」を確認することで、気をつけることや、探検のマナーについて自分から答え、その場で行動することができるようになった。

以下、学習中のエピソードをいくつか紹介する。2段階相当の児童である E 児は、「ラーメン」「公園」と自分の関心のあるものを言葉に出して探そうとし、B 児は、見つけた設備等を指差し「自動販売機あったよ!」「ほらセブンイレブンだよ」などと言葉にして教師や友達に伝えようとしていた。D 児は、興味のある店を複数選んで iPad で調べ、調べたことを発表したり、質問を考えて自分なりの答えを伝えたりすることができた。どの児童も、自分の関心事だけでなく、探検や見学等で自分や友達が見つけた施設・設備等や体験したこと、調べた店の種類などを、選択肢やスライド教材を見ながら、言葉で答えることができるようになり、表現のレパートリーが増加した。

3段階相当の児童である F 児は、学校の周りには「クリーニング屋がある」と答え、その理由を「制服をクリーニングに出すから」と、自分の生活経験から答えていた。また、探検中にタクシーの数を数え、48 台通ったことや、大きい道にはバスやタクシーが通っていることなどの気づきを発表した。C 児は、消防署の役割を「火事を消す」「ケガをした人を助ける」など答えることができるようになり、質問を考えて消防士に質問することができたほか、「火事にならないように、ストーブやエアコンを消したか確認する」と自分ができることを考えて言葉にする姿が見られた。

②その他の場面

家庭との連絡帳から、児童の多くがその日に学んだことや見つけた設備等を家庭で言葉にしたり、家族に説明しようとしたりする様子があったことが窺えた。D 児は、交通マナーについて「信号が変わったあとに左右を確認してから渡る」姿が家族との移動時にも見られるようになったと、保護者が大きく評価していた。また、B 児も、「探検したよ」と「〇〇を見つけました」と学校であったことを家庭で頻繁に話すようになり、お店探検の後には自分から国語で使用した絵本を持ってきて「〇〇やさんです」「何を買いますか?」と家族に話しかける姿が見られたと報告があった。

A 児は、学校の周辺にある消火器、消火栓を探す活動をした後、学校内の消火設備を把握し、周囲の大人に伝える様子があった。また、授業中に出た「大使館って何だろう」という疑問に対し、「〇区にあるよ」と自分の知識で答えながら、大使館の機能について休み時間に自発的に iPad で調べ、帰りの会で発表するなど、授業で見聞きしたことや学んだことをさらに深めようとする姿が多く見られた。また、家庭でも詳細に報告をしているとのことだった。「地図」に興味を持ち、自分が行った場所を地図で伝えようとしたり、Google マップや Google Earth (Google LLC) で気になった場所を調べようとしたりする児童も増えた。

今回は、「学校の周りを探検しよう」の単元として長期間実施したが、次年度以降は、「学校の周りを探検しよう」(1.2.3 次)「みんなの街を探検しよう」(4.5.6 次)のように分けて実施することを検討する。

(文責：Ⅱ-2-4) 高津梓、田上幸太、宮林一菜)

3. まとめと今後の展望

1) 知的障害特別支援学校小学部生活科カリキュラムの構築と内容の充実

今年度は「生活で育みたい力」を検討し、学習指導要領の内容を対照させながら、年間の授業について実践と検証を進めた。単元終了時または学期末に、単元について「時数」「目標設定」「題材」「教材・環境設定」の項目で授業評価を行ったところ、教材や授業の手続きについては改善が必要な部分もあるが、目標・内容の設定についてはおおむね妥当であったと考えられた。2月中旬現在において、計画した単元の多くが計画通りに終了した。次年度に向けて、より生活科の内容に迫ることができるよう改善を進めていきたいと考える。

一方で、道徳と生活科を合わせた指導については、2年間の試行過程で、道徳の内容項目を網羅しながら生活の学習内容に迫ることが難しいことから、次年度以降の取り扱いを再検討する予定である。

2) 学び方の多様な児童が協同的な活動を通して学び合う、集団の授業づくり

具体的には、「2. 授業づくりの実際」の項で示したとおりである。

例として、はな組では、板書や絵本などへの注目が難しい児童のために、児童が注目しやすい大型モニタを用いて、絵本の読み聞かせや歩行者信号機を映し出しての事前学習を行った。そのことにより、該当の児童だけでなく全ての児童にとって注目しやすく学びやすい教材となっていた。

つき組では、歩行で気を付けることやバスのマナーを確認する際に、教師の発問に応じて想起して言葉で伝える児童や、しおりなどの手がかりを見て答える児童、選択肢から選んで答える児童など、実態ごとに発問や提示の仕方を工夫した。児童が iPad に設定された選択肢ボタンを選ぶと、音声や実際の活動の動画がモニタに出力されるように設定することで、本人は自分の選択の結果を確認でき、また、他児童も一緒になって繰り返し学ぶことができていた。

そら組では、見つけた設備等に印をつけるものと、数を数えて記録するものの2種類の探検カードを実態に合わせて使用したり、写真撮影やウェアラブルカメラでの動画撮影、撮影許可の依頼や質問をする係などの役割分担をしたりすることで、同じ活動をしながらも個々の目標にあった学習機会を設定することができた。それぞれが持ち寄った素材で振り返りをするすることで、仲間同士での学び合いが促進されたと考える。

このように、児童一人一人の目標や学び方に合わせて教材教具や支援を工夫しながら集団で活動することで、児童全体の学びやすさや、学習したことの確認の機会、児童同士が協同的に学ぶ切っ掛けなどに繋がっていくことが示唆された。さらに、互いを意識した仲間関係の中で、拍手や「いいね」「〇さんは～なんだね」の言葉かけなどの相互評価が生まれたことで、授業そのものへの参加が促進されていったと考える。

3) 目標を達成するための題材選び、個々の児童に合わせた教材の工夫

今年度は、社会科につながる内容を抽出した授業のうち、地域をテーマにしたもの

をモデルにして、各学級の授業づくりについて検討した。第一にどの学級も、学習指導要領の内容を押さえつつ、児童の興味関心や生活文脈に沿った題材設定をしていたことが特徴であり、このことが児童の学びに向かう意欲を高め、児童の日常生活に広がる学びになっていったと考える。

はな組では、目的地である店に行き行って買い物をすることを通して、外を安全に歩いたり、信号を守ったりする「きまり」を学ぶための活動を行った。明確な目的地がある活動のなかで、そこで買い物をしたり、買ったものを他の学習で使ったりすることで、今後の「おでかけ」への関心や期待感を高めることもねらっている。一方で、つき組・そら組では、目的地が明確に定められていない、地域での散策を通して、身の回りに広がっている社会に注目することや、今まで見えていなかったであろうものに注目することを促すための活動を行った。さらに、その地域の人と一緒に社会で生活するために必要な「マナー」を学ぶことや、店の人の働く姿を見たり話しかけたりするなどの「人との関わり」を経験している。大きく「校外へのおでかけ活動」という体験的な題材を共通して取り上げながら、前項で述べた個々に合わせた教材や機会を設定することで、「目的地のある」おでかけから「社会を観察する」「地域の人と関わる」おでかけへと、学びの視点を段階的に広げることが可能となった。これが「社会の中での自分を考える」ことの基盤となり、中学部以降の社会科の学習に繋がっていくと考える。

さらに、つき組の実践では、決まりとしてのマナー学習ではなく、人との関わりの中で、相手が嬉しい気持ちになることを心地よく感じること（利他性）や、相手の良い感情が自分に返ってくること（互惠性）に気づきを促しながら、「マナーを守ることの意味」の学習を支援している。他者と一緒に心地よく過ごすためのマナーを学ぶことは、将来、自分が社会に働きかけ、また、自分がどのように社会に働きかけていくかを考える、「社会参加」へつながる力となると考える。

4) 教科横断的な学びの試行と整理

生活科を教科として実施する上で、その学びを支える各教科との関連について、各学級の実践から考察を行った。

はな組の学習では、他の授業で使うものを買に行きながら、安全な歩行やお金の使い方を学ぶといった生活経験としての横断が行われていた。授業で使うものを買うという必要性が、買い物や安全な歩行への切っ掛けとなり、安全な買い物をした結果として、図工や音楽など他教科の楽しい学習が成立する。この仕組みが日々の生活へとつながる学びとなっている。

つき組やそら組の実践では、1つ目に「学習のテーマや題材（コンテンツ）による横断」が設定されていた。例として、大塚祭に向けて音楽で「きつね坂8」としてダンスを踊った後に、生活科でその「きつね坂（文京区千駄木）」に行くことや、国語で消防署に関する絵本を読んで生活科で消防署に見学に行くなどである。コンテンツによる横断では、様々な教科を通して育まれた児童の興味関心が、生活科における学びの切っ掛けとなるという良さがある。2つ目として、各教科で学んだ見方・考え方を発揮しながら生活科の学びに向かう「資質・能力（コンピテンシー）による横断」が多く設定されていた。例として、算数で学んだ物を探したり比べたりする力を生かして地域を

散策する、国語で学んだ気持ちや動きの言葉などを生かしてバスのマナーを学習する、図鑑で調べたことや疑問に思ったことを言葉にする力を生かして消防署の見学や消防士との質問のやりとりをするなどである。児童の生活に沿った学びを進めていく上では、生活科だけでなく各教科の評価も含めて総合的に一人の人間としての資質・能力を評価する工夫が必要となる。そのため、生活科の学習において発揮される各教科の見方・考え方については、今後、より意識的にとらえ、各教科と生活科との関連を明らかにしながら実践を進めていく必要がある。

5) 次年度に向けて

今年度の取り組みを土台として、次年度は「小学部生活科から中学部・高等部社会科へのつながり」と「小学校生活科との連続性」の二つの「学びの連続性」と、「児童の学習と教師の指導改善につながる学習評価」について検討する。

小学部「生活科」から中学部・高等部「社会科」へのつながりについては、今年度「郷土や地域に関する教育」という全校共通のテーマが設定されていたことで、意識的に取り組んではいたが、まだ双方向での検証は行えていない。そのため、中学部・高等部社会科の実践が蓄積されてきた次年度に、全校研究として検討していく必要がある。

小学校「生活科」との連続性についても、学校研究方針を受け、引き続き検討していく。小学校学習指導要領における「生活科」では、「公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすること（思・判・表）ができ、身の回りにはみんなでするものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かる（知・技）とともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする（学）」とあり、特別支援学校学習指導要領における「生活科」とは成り立ちや構造が異なっている。この点においていかにすり合わせを行い、内容として設定していくかが課題となる。

学習評価については、今年度ルーブリックをはじめいくつかの方法での評価を試行した。この成果と課題を整理し、指導と評価の一体化に向けて検討していく。さらに、単元の評価、生活科としての評価だけでなく、一人の児童としての総合的な成長を捉えていくための評価の在り方について検討していく必要があると考える。

同時に、今年度作成した単元配列表や指導計画等を整理し、引き続き実践を進めながら、指導の再現性についても検証していく。

（文責：Ⅱ-3 高津梓、田上幸太）

【付記】

本研究は、横倉久氏（国立特別支援教育総合研究所）、吉井勘人氏（山梨大学大学院総合研究部）、米田宏樹氏（筑波大学人間系）の指導助言を受けた。

【文献】

- 文部科学省(2017)特別支援学校小学部学習指導要領，平成29年4月告示
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領 解説 生活編 平成29年7月
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領 解説 社会編 平成29年7月
- 文部科学省(2018)特別支援学校学習指導要領解説 各教科編，平成30年3月
- 筑波大学附属大塚特別支援学校(2019)研究紀要 第63集
- 筑波大学附属大塚特別支援学校(2020)研究紀要 第64集
- 筑波大学附属大塚特別支援学校(2022)研究紀要 第66集

（文責：高津梓、田上幸太、宇佐美太郎、加部清子、環航世、田中翔大、森澤亮介、兼子南、宮林一菜）